

## 導入

言葉の意味は、他の言葉との関係で成り立つ。例えば、色語に関して言うと、ピンクという言葉を使うためには赤とピンクの境界線を認識する必要がある。

子供にとって色語獲得は他の言葉(名詞・動詞など)に比べて難しいとこれまでの先行研究で言われているが、一括調査で得たデータがほとんどで子供が色語を獲得できていない状態からどのようにして獲得していくのかという過程を検証されてこなかった。

本実験では24か月から44か月の子供を対象に、毎月1度同一の子供たちに理解課題と産出課題を同じ日に行った。実験には基本色名11色から無彩色を抜いた8色を使用し、理解課題は絵本形式で8色のチップを選んで取ってもらうという方法を用いて子供が課題に乗りやすい工夫した。産出課題は車や傘などのオブジェクトをくりぬいたシートを使いランダムに8色を聞き、答えてもらった。その結果、理解・産出共に子供が正答率4/8~5/8から6/8~7/8になる間で色と色語のマッピングをすることができると示唆された。

## 方法

### 協力者

園児 49名

※男性 33名, 女性 16名, range=24~44month

### 刺激



理解→絵本を作成。4ストーリーあり、各2色ずつ計8色回答してもらう

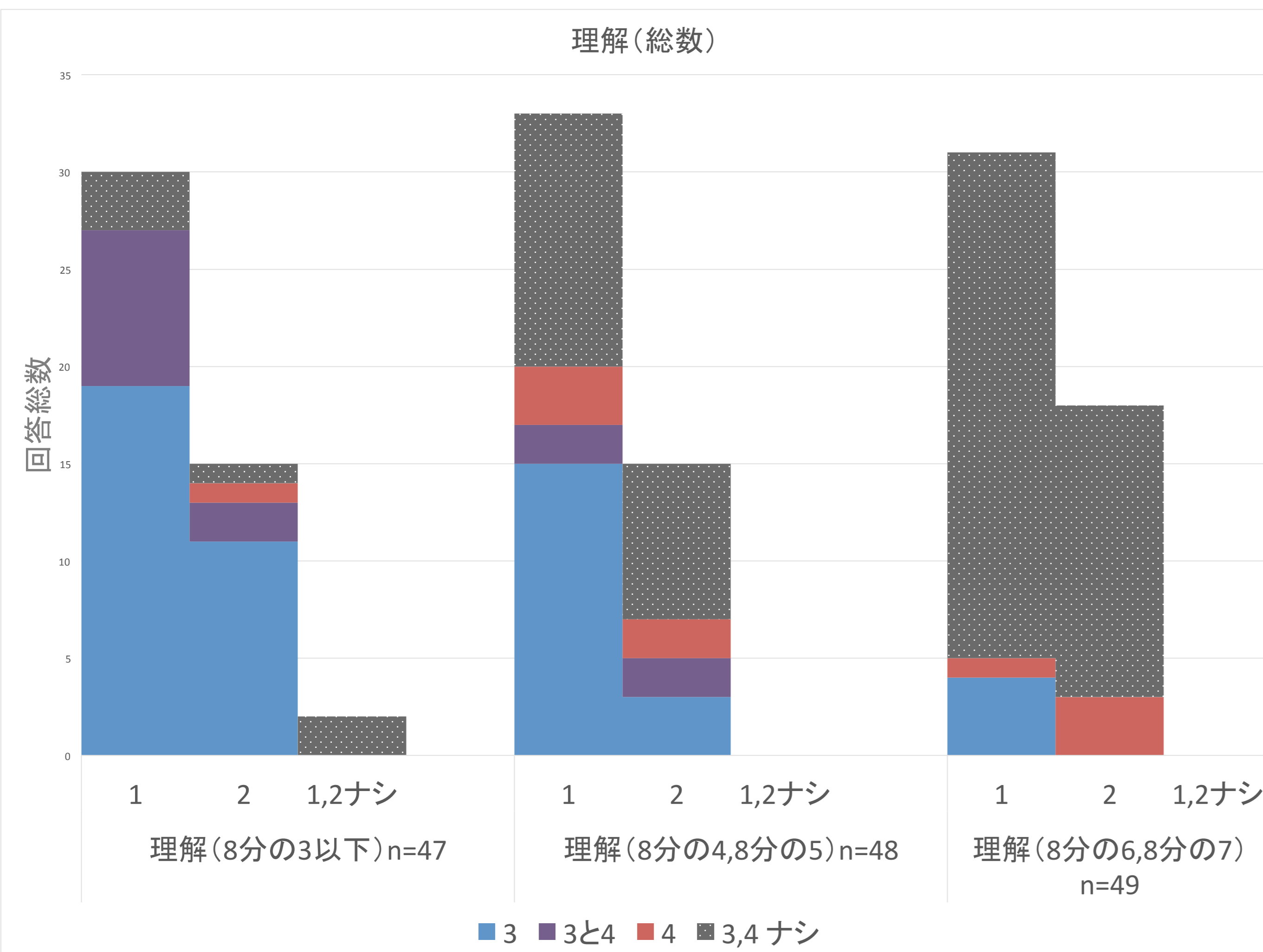
産出→オブジェクトシートを用いてランダムに8色を聞き、回答してもらう



### 調査方法

継続調査を行い、毎月1人1回7月から12月まで行った。  
2歳(24~26か月)になった子供から調査対象に加えた

## 理解結果・考察



### 基本パターン

- 1 遠い色を選択
- 2 近い色を選択
- 3 特定の色を選択
- 4 特定の色の間でスイッチ
- 5 全て正答

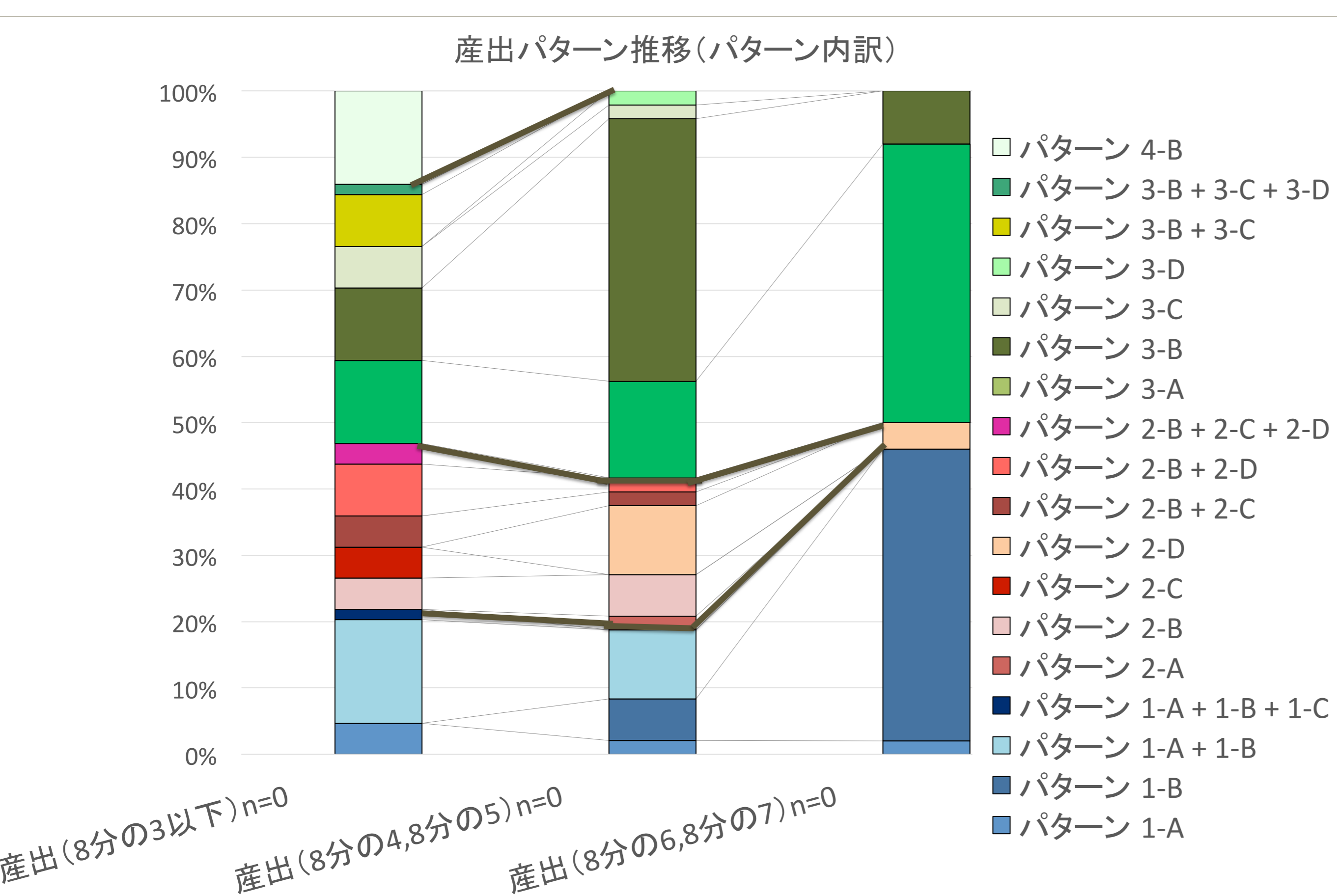
### 複合パターン

- 1+3 遠い色と特定の色を選択
- 1+4 遠い色を選択し特定の色の間でスイッチ
- 1+3+4 遠い色と特定の色を選択し特定の色でスイッチ
- 2+3 近い色と特定の色を選択
- 2+4 近い色を選択し特定の色の間でスイッチ
- 2+3+4 近い色と特定の色を選択し特定の色でスイッチ

- 1+3, 2+3が8分の3以下では多数を占めるが、8分の6,7ではほぼ見られない。
- 同様に、1+3+4, 2+3+4は8分の6,7では見られない。
- 1のみ、もしくは2のみのパターンが8分の3以下では極端に少ないが、それ以外のグループで多数を占めるようになっていく。
- 1+4, 2+4は(1+3+4, 2+3+4も含めて見ると)一定の割合でどのグループにも見られる。
- 全体的どのグループでも、パターン1の誤りとパターン2の誤りの比率はだいたい2:1(実際は8分の3以下30:15, 8分の4 or 5 33:15, 8分の6 or 7 31:18)
- NAがあるのは8分の3以下の2名のみ

色ごとの正答率を見たところ、最後までもっとも出来ない色は「緑」で黄と青で混合している割合が高かった。また8分の3以下は赤・青・黄・ピンクの汎用率が高かったが、8分の4,5になると緑・紫・茶の汎用率が高かった。また、茶と紫に関しては、遠い色で間違えていることが多かった。8分の4,5から8分の6,7になる時、全体の正答率が大きく上昇していることから、この間で色語のマッピングが構築されるのではないかと考えられる。

## 産出結果・考察



### 基本パターン

- |                      |                     |
|----------------------|---------------------|
| 1-A 特定の色を回答          | 3-A 分からないまたはNA      |
| 1-B ランダムな色を回答        | 3-B 分からない+ランダムな色    |
| 1-C 特定の色をスイッチ        | 3-C 分からない+特定の色      |
| 2-A オブジェクトのみ回答       | 3-D 分からない+特定の色をスイッチ |
| 2-B オブジェクト+ランダムな色    | 4-A 全て正答            |
| 2-C オブジェクト+特定の色      | 4-B 全て分からないまたはNA    |
| 2-D オブジェクト+分からない     |                     |
| 2-E オブジェクト+特定の色をスイッチ |                     |

- 8分の7以下では、パターン1はほとんど1-Bでパターン2がほとんどみられない。
- パターン1の内訳は1-A+1-Bから1-Bへと変わる。
- パターン2の内訳は統一されておらず、2-Dが1度増えたが8分の6,7の時は少し減っていた。
- パターン3はバラバラの内訳から、3-Bが増えて、最後は3-Aが多数を占めた。
- →8分の3以下で何色が分からないのか分からないという状態から色語を汎用することでだんだん色と色語のカテゴリ化ができるようになり、8分の6,7になるとどの色が分からないのか分かるようになる と考えられる。

8分の3以下では茶・紫・緑・橙の正答率が著しく低く、また分からないやNA、またはオブジェクトの回答がものすごく多かった。同時に赤・青・緑・黄の汎用が目立った。また8分の3以下で出来なかった色は8分の4,5でも分からないやNA、オブジェクトで回答される傾向があった。理解同様8分の4,5から8分の6,7になる時、全体の正答率が大きく上昇していることから、この間で色語のマッピングが構築されるのではないかと考えられる。さらに、色語で答えるようになると、黒や水色という8色以外の色を発言するようになった。